

・ 分担研究報告

平成 30 年度 厚生労働科学研究費補助金(認知症政策研究事業)
認知症の人やその家族の視点を重視した認知症高齢者にやさしい薬物療法のための研究
分担研究報告書

認知症患者への薬物治療が生命予後に及ぼす影響についての検討

研究分担者 水上勝義 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授

研究要旨

臨床神経病理学的に認知症と確定診断された 76 名を対象に、薬物療法と入院後の生存期間との関連を検討した。その結果、5 剤以上の多剤併用群は、4 剤以下群と比較して生存期間が短くなる傾向を認めた。

A. 研究目的

認知症高齢者の薬物治療の影響についての詳細な報告は未だ乏しい。そこで認知症高齢者の薬物療法と生命予後の関連について検討した。

B. 研究方法

2012 年 1 月～2016 年 12 月の 5 年間に愛知県内の老人病院に入院、死亡退院し、剖検により臨床神経病理学的に認知症と確定診断された患者を対象に後ろ向き観察研究を行った。

(倫理面への配慮)

筑波大学体育系と当該病院の倫理委員会の承認を得た。

C. 研究結果

対象 76 名の多くは重度認知症であった。入院時平均処方薬剤数 5 剤以上の多剤併用は 39.5%であった。歩行障害は全体の 65%と高率で、5 剤以上群では 4 剤以下群と比較し

て有意に多かった生存期間は ≥ 5 剤群が ≤ 4 剤群より短い傾向が示され、性別・入院時年齢で調整するとより顕著であった(HR1.631;95%CI,0.991-2.683; p=0.054)。

D. 考察

本研究は、認知症のなかでも重度に進行したケースが多く含まれた。このため慎重な薬物療法が実施され多剤併用が少なかったと考えられる。なお今回の検討では、慎重投与薬剤の使用と生存期間との関連については認められなかった。本研究は後ろ向き観察研究であり、因果関係については明らかでない。今後症例数を増やした前向き研究が必要である。

E. 結論

重度認知症高齢者へ 5 剤以上の併用は、転倒や入院後の生命予後短縮のリスクと関連する可能性が示唆された。

G . 研究発表

1. 論文発表

間辺利江、水上勝義、松岡珠実、小川倫
弘、兼坂岳志、谷口知恵、山本左近、橋詰良
夫、大原弘隆、山本孝之、赤津裕康 . 認知症
患者への薬物治療が生命予後に及ぼす影響
についての検討 . 日本老年医学会雑誌 56;2:
2019(印刷中)

2. 学会発表

なし

H . 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

なし